十八世紀ドイツの子どもの本(3)

エアフルト版『子どものメルヘン集』

佐藤　茂樹

メルヘンは子どものためならず

まず、この本のタイトルから見ていきましょう。「子どものメルヘン集」という訳は、ずいぶんこなれない訳と感じられるかも知れません。事実、意味だけ汲めば「童話集」と訳した方が日本語としてはしっくりきます。それでは、なぜ直訳のまま紹介するかということになりますが、その理由は、このふたつの言葉の組み合わせにこそメルヘンの出版とそれをめぐる時代の緊張が如実に見て取れるからに他なりません。

この本の序文も、メルヘンを書いていたという著者の分身に対して、友人（世論の代言者の役回り）の「あなたが、ですか。メルヘンを、ですって、何

と奇妙な」という台詞で始まります。結論から言えば、「子ども」と「メルヘン」という組み合わせは、十八世紀には自明のものではなかったということなのです。〈メルヘン〉という言葉は、この時代には、愚にもつかない作り話の総称にすぎません。少なくとも、子どもの教育を考えて書物を買い与えようという当時の親たちにとっては、メルヘンこそ子どもの前から根絶してしまわなければならなかった最大の脅威だったと言ったら、意外の感を抱かれるでしょうか。一世を風靡したある児童誌には、登場人物の父が自分の子どもたちを読者に紹介する場面で、「わたしは、けっして子どもたちの世話をおろかで頭にメルヘンのいっぱい詰まった子守り女たちにまかせたことはなかった」という台詞が出てきます。ずいぶんな言い草ですが、理性にもとづく合理的な世界観を至上とする啓蒙思想にとって、メルヘンは今なお迷信に満ちた旧世界を引きずる非合理的な考えの温床に他ならず、それを根絶することは市民階級にとっていわば階級的な急務でもあったのです。

メルヘンが長い年月を通して培われた掛け替えのない民俗的な財産であるという評価が一般化するのは、次の世紀の半ば以降の話になります。メルヘンの代名詞とも言えるグリム兄弟の童話集、すなわち『子どもと家庭のメルヘン集』が世に出るのは、一八一二年のことです。出版の当初、特に教育に携わる人々からの無理解やさまざまな批判にさらされ、受け入れの土壌が整うまでにはさらに歳月を経なければなりませんでした。今回ここで取上げる『子どものメルヘン集』は、啓蒙思想の最盛期にそれが退けようとしたものの中にこそ子どもの成育にとって大切な鍵を見出そうとした試みです。したがって、当時の児童書の王道から見ると、まさに異端であり、先例のない非常に大胆な試みであったと言えます。このことは、どんなに強調しても強調しすぎることはないでしょう。そのような位置づけを明確に

するためにも、ここでは、葛藤をはらんだふたつの言葉の組み合わせからなる「子どもメルヘン集」というタイトルを直訳のまま残しておきたいと思うのです。

口伝えの伝承の魅力

さて、前置きがだいぶ長くなりましたが、このメルヘン集は、一七八七年、匿名の著者の手によって出版されました。著者（一七五五―一八二六）は、ギュンターという姓（ファースト・ネームとミドル・ネームの表記には、クリスティアン・ヴィルヘルムやヴィルヘルム・クリストフ等の諸説があります）の聖職者で、晩年の二十五年間はワイマール大公領の孤児院の院長も務め、長く青少年の育成に携わりました。生涯の活動の中で、メルヘン集の編纂は一回限りの例外をなしています。

出版地の名を冠して「エアフルト版」と呼ばれることの多いこの書は、正確なタイトルを『口伝えの物語から編まれた子どものメルヘン集』と言います。「金の卵を産む小鳥」「白い鳩」「忠実な狐」「王妃ヴィロヴィッテとふたりの娘たち」の四篇のメルヘンと「友人との対話」（メルヘンをめぐる当時の事情を証言する貴重な序文）を含むささやかな書物でした。四篇のうち、先の三篇は紛れもなく口伝えの民衆的素材にもとづいており、最後の一篇だけさまざまなモチーフを自由に組み合わせた創作と見なすことができます。後に述べる理由から、これらのメルヘンはグリム兄弟のメルヘン集の陰に隠れるような形で忘れ去られていくのですが、「忠実な狐」はその後いくつかのアンソロジーに収録され、ドイツの読者は今日でも読むことができます。おおよそ、こんな話です――

長患いの王様がある晩、フェニックス鳥の歌声を聞くことが病気から癒される唯一の手立てだ、という夢を見ます。王様には、三人の息子がありました。賢いと評される上のふたりと単純な性格と目さ

れている末の息子です。その鳥を求めて三人の息子たちが順に旅に出るのですが、上のふたりは病人の伏せる陰気な家をこれ幸いと出て行き、行き着く所は悪徳の末路です。真摯に父の回復を願う末の弟だけが、持ち前の優しさで途中に出会う狐の援助を受け、フェニックス鳥の探索を続けることができます。それでも狐の助言を再三にわたって守ることができず、その都度窮地に陥る破目になります。鳥を手に入れるはずが、その前に魔法の馬を手に入れなければならず、さらにはそのために絶世の美しい姫を救わなければならず……という具合に難題は増えていき、身の危険は増すばかりです。忠告と違反、生命の鳥、動物の援助、魔法で動物に変えられた王子、度重なる窮地、怪物の手に囚われた美しい姫の解放……こうした魔法メルヘンに特有の様々な魅力的モチーフとその自然な展開が、最初から教訓の入れ物を意図して作られたこの時代の多くの物語に対して異彩を放っています。ここに、長い年月に渡っ

て培われてきた素材がそれを市民家庭の〈子ども部屋〉に橋渡ししてくれる人物と出会い、幸運に実を結んだ姿を認めることができましょう。

〈母〉への眼差し

では、この著者を他ならぬメルヘンに導いたものは何だったのでしょうか。著者は、それを「子どものためのメルヘンが不足しているというよき母親たちの嘆きに促された」と説明しています。このさり気ない母親への言及こそ、この時代に児童書に携わった大半の著者に比べて、この著者の位置を特徴的なものとしているひとつです。〈小家族制〉と呼ばれる家族構造の変化に伴って家庭内で新しい役割を担い始めたにもかかわらず、この時代には〈母〉が語られることはまれでした。前回紹介した『ロビンソン・ジュニア』にしても、母親の役割は、食事の準備ができたと呼びに来る程度にすぎず、一貫して〈父〉の導きが中心をなしています。また、『父から子への助言』と題した本は多々あっても、『母からの……』を見つけ出すのは困難です。

職住一体の大家族制の時代と比べて、市民社会に成立した〈小家族制〉は職住の分離に最大の特色があります。〈小家族制〉とは、両親と子どもを基本

単位とし、血縁のない同居者を含まない家族構成です。この家族構成の変化によって、かつて血縁以外のさまざまな立場の人々を含んだ小社会であった家庭は、完全に私的な領域へと姿と意味を変えます。大家族制はいわば生産共同体であり、その中で各自が担う役割は、均等な質の労働の主として身体的な能力に応じた量的な配分であったと言えます。それに対して、この新しい家族制度の下では、質的な違いが生じます。家計を支えるのはもっぱら父親の役割になり、その父親は家庭の〈外〉にある職場に出勤するのが通常となります。母親は、就労から解放されて、もっぱら家庭を快適な生活の場に整えることに一日の大半を費やすようになります。子どもも、もはや身体的に未熟な労働力ではありません。〈幼年期〉という固有な時期を割り振られた、将来の階級の担い手です。この家庭内の新たな分業によって、家庭内で時間の大半を共有する母親と子どもは、お互いにこれまでと異なる関係を模索する間柄になります。そして母親は、これまでの身体的な意味での育児にとどまらず、精神的にも情緒的にもはるかに大きな領域を子どもと分け持つことになったはずなのです。それなのに、変化の一方の当事者である母親は、まだ児童書の中に発言の場を持ちません。これまでにも触れた通り、理性とそれにもとづく形成を代表する〈父〉の役割にしか照明は当てられていないのです。

こうした時代を背景にしながら、著者は、「子どものメルヘンが不足しているというよき母親たちの嘆きに促されて、それらを書き留める気持ちになりました。そして、彼女たちの賛同に勇気付けられて、印刷させる」ことにしました。ここには、〈父〉一辺倒の児童書の表通りの言説の陰で、母親も同様に子どもの教育の一翼を担おうとしていた現実が証言されています。しかも、自分たちの求めるものが欠けているというのですから、表通りの言説が母と子の実情をかならずしも満たしたものでなかったと

いうことになります。そして、著者が母と子の関係の絆として求め、母親たちの「賛同」を得た素材は、父親の理性が退けたものだったのです。

高次の存在の導きの手

繰り返しになりますが、十八世紀の児童書のバックボーンである啓蒙思想は、メルヘンを無知に由来する荒唐無稽な作り話と捉えていました。幼いうちからメルヘンに染まると、ありもしないものを恐れるようになり、現実を直視して原因と結果を究める意思と能力を育成できない、というわけです。その反対に、理想とされるのは「構造は透明で、素材の配列は首尾一貫し、明白な思考の展開と簡潔だが適確な言葉づかいを持つ書物」です。こうした書物を通して、子どもは現実の出来事の〈論理的連関〉を学ぶことができると考えられたのです。

これに対して、『子どものメルヘン集』の著者は、メルヘンも「真実への愛」に由来するものであることに変わりないと述べて、メルヘンを擁護します。メルヘンとは、「高次の存在の見えざる手によって織り成され、導かれる不可思議な出来事の物語」の謂です。荒唐無稽に見えるとしたら、それは理性による分析的・合理的な理解の仕方とは〈異なった〉仕方で生を把握する試みゆえ、に他なりません。だからこそ、メルヘンは「（大人の男性に比べて）原因と結果の因果関係に囚われることの少ない子どもにこそふさわしい」という結論がここから導き出されていきます。ここには、メルヘンの価値を一元的に現実との合理的対応関係に従属させる見方から解放する斬新的なメルヘン観を認めることができます。理性の法廷で一方的な蔑みに晒されるばかりであったメルヘンは、ここに初めてふさわし弁護者を見出したと言えるでしょう。

著者は、執筆中に「こころ全体であらゆるものにあのように親密に係わりを持ち、魔法にかけられた王子が無事救い出されるのをあのようにこころから

喜ぶことができたあの幸福な時代への追憶」が蘇ってきたと記しています。メルヘンを楽しむということは、けっして物語そのものをそっちのけにして、絵解きに終始したり、教訓だけ引き出してそれでよしとしたりするものではありません。読者は、物語という形を通してしか伝わらないものを体験するのです。そして、それを受けとめるのは、理性といった局所的な能力ではなく「こころ全体」なのだと述べた点、そしてメルヘンは自身の内にそのような「こころ全体」で物事に係わりを持てた幼年時代を宿していると考えた点に、この著書を次の世紀につなぐものを見出すこともできるでしょう。

グリム兄弟の陰に隠れて

グリム兄弟は、自分たちのメルヘン集を世に送るに際して、序文の欄外注でこのエアフルト版のメルヘン集を評して「貧弱」のただ一言で片付けます。この「貧弱」が収録された本数のことか内容に立ち

入っての評価かいまひとつ定かではありませんが、グリム兄弟のメルヘン集が時代につれて評価を高め、ドイツのメルヘン集を一手に代表するほどに神格化されていくだけに、この一言の後世に果たした役割は小さいものではないでしょう。

このメルヘン集に限らず、時代を画する業績の陰で、先駆的な試みのいくつかが忘れ去られていくのは、世の常なのでしょう。特に先駆的な試みを特徴付けている要素こそが、評価基準の一元化した後では、マイナスの評価の要因となるものです。『子どものメルヘン集』では、各モチーフの展開に充分な余地を与え、発端から結末まで必要な話の分量を無理なく確保するために、一話を何夜かに分けて語り聞かせる工夫が施されました。例えば、先に紹介した「忠実な狐」（九四―一五〇頁）では、四夜に分割されています。語り聞かせる「母親にとっては負担が多くなり過ぎず、子どもたちは翌晩の続きをそれだけ熱心に待ち望む」ようにという配慮でもありました。後世の評価には、まさにこの工夫と配慮が災いします。記憶から語り聞かせるのにふさわしい分量を自然に形成してきた民衆の知恵に対する無知の表れに他ならない、というわけです。また、目に見えない力への畏怖を形象化した妖精の導入も、フランス趣味の模倣としか見なされなくなります。妖精は、登場人物に試練を課し、見守りながら、最終的な調和へと導いていくのですが、この妖精の果たす教育的機能をメルヘンというメディアそのものの教育的機能と重ね合わせた着想は顧慮されず、自然な結末を損ねる機械仕掛けの解決手段に走ったことになってしまいます。こうして、ひとつの絶対的な評価軸が確立してしまった結果、いわば、ないものねだりをされ、本領とはずれた箇所への批判を招いていくのです。これは、このメルヘン集を時代の枠組みの中で公平に位置づけ、著者にふさわしい評価を願うものにとって、たいへん残念なことと言わざるを得ません。

（関東学院大学）